

「一流になりなさい。それには、一流だと思込むことだ」という本からです
人間の能力の種類はいろいろある。いろいろやらせなければ分からない。

他者オール肯定。これはどんな局面でも、船井幸雄の人間観の中心にあると思います。過去オール善とともに、二本の発想の柱なのでしょう。「その人の長所を見つけるまでは、叱っていけないよ。愛情がその人に対して十分ではないということだものな」そう言われたことがあります。

一人の人間に愛情という源から視線を向ける。長所を見つけられないのは、愛情が足りないからだよ。一瞬、言葉を失ってしまいました。相手をつい否定的に初見で判断している自分に、そのとき気づかされたからです。それは、「さあ、こいつの欠点は何かな？」などと意地悪な気持ちがあるからではありません。つい、なんの気なしに、相手の欠点をカウントしている自分に気づいたのです。

「そんなものだよ。だからね、長所をカウントしながら人を見るクセをつけたら、いいんだよ。すぐ、身につくさ」そして、カウントした長所をくくりにして、タイトルをつけてあげる。小さなセミナーで、船井先生が壇上に上るほんの数分の間でのことでした。セミナーの段取りがいま一つ上手くいってないなと思い、担当者が少々気のきかない奴でと、話をしたときのことでした。講演前に余計なことを言ってしまったな。少し後悔をしていました。そんな私の顔をのぞき込むように、先生の笑顔が視野に広がりました。「人間の能力の種類はいろいろあるからな。いろいろやらせないで、わからないよな」どんな人間も、役割を果たすために長所をもって生まれてくる。何度も何度も聞かされて、合点がいつているはずのことです。上司や先輩は、その長所を見つけてその役割を示してあげることこそ使命。そんなことを一人前の顔で話していても、まだまだ浅い。船井先生が壇上へと向かう背中を見送りながら、思いました。人は、いまの自分の立場や必要性、そして相性で他人の評価を簡単に下してしまいます。でも、自分のために他人が存在しているわけでも、自分との相性が世界の基準でもないのです。そんな自己中心的な視線から離れて、いつも考えながら対話をする船井先生に気づかされました。

「この人の長所は何だろうか？」一つの仕事を任せる。成果が出ないときに簡単に否定してしまうことを。船井先生は戒めます。「駄目なんじゃないよ。その仕事が君に向いてないだけだ。君の長所を活かせる仕事をしてもらわないとね」失敗を詫げる社員に、こう語りかける船井先生を何度目にしたことでしょう。そして、最後に必ずこう言うのです。「ごめん、ごめん。今度は君にピッタリの仕事をしてもらうからね。そう言えば佐藤君、あの件は彼にやらしてもらえば最高では？」「失敗とは、次の挑戦への入口に過ぎない」この言葉は、アメリカの自動車王、フォード自動車の創業者、ヘンリー・フォードの言葉です。彼は、二度自動車メーカーを創業したのですが失敗。三度目に、T型フォードの開発で大成功を収めて自動車王の座へと上りつめました。失敗は成功への教訓だったのです。確かに、人間の長所とは、他人の自己中心的価値観や一面的見方を見つけることは難しい。そのベースに、人間に対する愛情がなければ、長所すら発見できないものだと教えられます。「長所が見つかるまで、いろいろとチャレンジしてごらん。何もしないのが、一番悪い」その言葉をようやく使える自分がいます。

アメリカの自動車王、ヘンリー・フォードは何と言っていますか？

()

船井幸雄は失敗を詫げる社員に何と言っていますか？

()